

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣 参加報告書」

京都大学文学研究科修士二回生 横井啓人

今回のハイデルベルク・ストラスブール大学の訪問は、私にとって貴重な経験となりました。今回のプログラムの報告につきましては、派遣された学生間の相談の上、それぞれ担当するテーマについて報告する運びとなり、私はハイデルベルク大学の日本語学部（クラスター）を中心に、欧州における日本研究も考慮しながら論じようと思います。

まずハイデルベルク大学日本語学部に訪問した際に、私たちは当学科の図書館に赴きました。図書館には日本の文献や書籍が数多く収蔵されていて、歴史系を中心に人文系が多い印象を受けました。しかし日本史系の書籍は、近世以降主に近代のものがほとんどで、学術専門書について言えば近代の書籍が圧倒的でした。一方で、日本の古代中世の書籍ですが、概説書はありましたが学術専門書はほぼ無く、日本の古代中世については学術的な需要や研究がほぼ存在しないとの事です。ドイツや欧州が日本と関係を持つようになった近世・近代以降の日本史学が研究対象になり易いのは自明の事で、自身の研究分野である日本古代史の研究が欧州で行われる素地は、限りなく少ない事を痛感せざるを得ません。

その後当学科の先生・生徒の方と会話する機会を得ました。それによると、ドイツに限らず海外における「日本」のイメージはサブカルチャー的なものが目立ち、日本語学科にはそのサブカルチャーに興味を引かれて入学する学生が多いとのことです。一方で、福島原発の事故や、それに影響を受けたドイツの脱原発の政策に興味を持ち日本語学科に入る学生も増えてきているようです。要するに、当大学で日本を研究する場合は、その視点がサブカルチャーや原発など、特定の課題やドイツ社会と関係のあるものに集中しやすい傾向があり、政治や経済など様々な分野に研究が発展していかない現状が見てとれます。

一方で当大学におけるアジア研究の主眼は、徐々に日本から中国へシフトしていると先生は指摘していました。詳しく比較すると、ハイデルベルク大学の日本語学科の講師陣は3人（内2人日本人）で学生数は400人、一方で中国語学科は教授が8人で学生が300人です。学生数で日本語学科は郵政、実際その潜在性・発展性は中国語学科に言わざると得ません。先述したように、日本語学を学ぶ学生はサブカルチャーなど特定の分野偏っている傾向があるのに対し、中国語学は文化のみならず政治・経済など幅広い分野の教授陣を揃え、中国という近年成長を遂げる国家を多角的に分析する準備が整いつつあります。

つまり以上の結果から、交流先の大学特にハイデルベルク大学における日本研究は、次第にその重要性を後退せざるを得ないかと危惧するに至りました。ドイツと近年経済面で関係を強化し発展を遂げる中国に、アジア・ヨーロッパ間の研究の視座が向きつつあります。この点も踏まえつつ、本研究科とハイデルベルク大学の交流強化は迅速かつ強固に推進し、欧州における日本研究の分野の幅を広げてその研究状況を発展させるべきと考えます。